

【編集後記】

広島部落解放研究所の研究紀要『部落解放研究』19号をお届けする。ナショナリズムが煽られ、政治が右傾化し、憲法や自衛隊、天皇をめぐる危険な話が飛び交っている。日本はいつか来た道をまた歩むのか。こう危惧される昨今である。人間は、愚かな生き物である。死ぬほど辛い体験をしても、それを忘却する。巻頭の石原論文の告発に、「日本人」は、心して耳を傾けなければならない。本号は、まず、被差別部落の生活実態を分析する論文を取めた。そこに、特措法以後の被差別部落の厳しい生活実態をみる。実態的差別は「解決した」という認識は誤りであり、実態的差別の解消に独自の闘いが必要となる。そのことが立証された。また、被差別部落の文化をめぐる言説の脱構築を図る論文を取めた。門付け芸の音楽社会学的な分析により、仮構の言説批判がなされた。次いで、寄せ場・釜ヶ崎のホームレスと生活保護受給者、外国人生徒の高校進学の困難な状況、およびフィリピン・マニラの先住民の生活・貧困・ネットワークを分析する論文を取めた。そこに、現代(都市)の底辺・周縁に顕在する収奪と差別の諸相を生きる人びとの生活現実が描かれた。このように本号は、都市・差別・貧困・生活戦略の分析というかたちで、全論文を繋げることができる。そのような、読者の皆さんの「読む構想力」を期待したい。本誌が、部落差別と闘い、社会の底辺と周縁に生きる人びとと手を繋ぐ、そのための理論と検証の場となるよう、さらに奮起したい。

〈A〉